

ナシヨナリズム実践としての「8.15」ドキュメンタリー

—崔銀姫著『「反日」と「反共」…戦後韓国におけるナシヨナリズム言説とその変容』—

趙相宇

一 はじめに

韓国社会の主要なナシヨナリズム言説とは何で、その中で韓国社会のナシヨナル・アイデンティティはいかに構築されてきたのだろうか。この問いは一見、日本社会とは何ら関係のないものに見える。韓国社会のナシヨナリズムの問題を、なぜ日本で考えなければならぬのか、という疑問も浮かんでくるに違いない。

しかし、しばしば韓国社会のナシヨナリズムを表す主要なキーワードとして「反日」や「反共」という言葉が使われるように、韓国社会におけるナシヨナル・アイデンティティは日本による植民地支配や冷戦構造

における日米韓協力体制の中で構築されてきたと言っても過言ではない^(一)。特に、日本以外に八月一日を公式な「終戦日」としているのは、韓国と北朝鮮のみであるという佐藤卓己の指摘があるように^(二)、とりわけ韓国社会における八月一日という日付(『光復節』)を考察することは同時代の日本社会のことを韓国社会の視点から考える上で欠かせない問題である。

本稿で取り上げる崔銀姫著『「反日」と「反共」…戦後韓国におけるナシヨナリズム言説とその変容』は、韓国の主要な放送局の一つである **KBS** が戦後に制作してきた「8.15『光復節』ドキュメンタリーシリーズ」をバフチンの「対話」という視座から分析し、主要な

イデオロギー装置であった光復節特集の内実を明らかにすることを試みた著作である。タイトルからわかるように、著者は「反日」や「反共」というキーワードを中心にこれらの言説が含意する「他者性」を国内や国際的な動向に位置付けながらその内実を具体的に示し、韓国社会におけるナショナリズムの実践を明らかにすることを目的としている。

これまで韓国社会のナショナリズムを考察した論考は数多くあったが、その主要な実践の一つであった八月一日をめぐるメディア言説について通時的にまとめた研究は少なかった¹⁰⁾。そのため、戦後一貫して毎年のように祝われた八月一日をめぐるメディア言説やそのアーカイブ状況の詳細は依然として不明なままである。本書の韓国社会における八月一日をめぐるメディア言説の詳細を明らかにする作業は、韓国現代史の理解に必ずあつて然るべきものであったと言え、その意味において本書の重要性は際立っている。さらに、冒頭でも述べたように、韓国の現代史が植民地支

配や冷戦構造に巻き込まれ続けたことを考えれば、本書の作業は東アジアのポストコロニアル問題を考える上でも重要である。

次章では本書の内容を章ごとに要約し、本稿の第三章では本書の意義と課題を述べる。

二 本書の要約

第一章 様々な「反植民地支配ナショナリズム (Anti-colonial Nationalism)」: 「前景」と1940~1950年代

植民地解放前後やその後の分断国家成立と混乱の中で、韓国社会の主要なナショナリズムはどのように形作られたのか。そして、この時に形作られたナショナリズムの枠組みは、その後の「815特輯放送」にいかにつながったのか。その「連続」と「屈折」の「前景」を確認するのが本書の第一章である。

著者は「反日」と「反共」を軸に①「反日」と「反共」、②「親日」と「反共」、③「反日」と「親共」、④「親日」と「親共」の四つの領域を提示し、植民地解放前後に関わる主要な勢力やその動きをこうした枠組みを軸にして考察している。植民地解放前後のナショナリズムの主要な担い手が具体的にどの領域に属しており、大韓民国の樹立や朝鮮戦争を経てそれらがいかに変化するかを示したのである。

植民地支配下における「反植民地支配ナショナリズム」の主要な担い手をこれらの四つの領域に当てはめると、次のようである。在米韓国人コミュニティを中心とするエリート知識人が中心となった「ブルジョワ民族主義者」たちのグループや、上海・重慶の大韓民国臨時政府の勢力は「反日」と「反共」を中心とする領域①にあたる。一方、日本やロシア、中国、ヨーロッパへ留学や移住していた人たちによる初期の共産主義者グループは「反日」と「親共」を中心とする領域③にあたるという。

植民地解放後、領域①の中心的な人物であった李承晩は一九四八年の八月一日に樹立した大韓民国の初代大統領となるが、その政治路線は米軍政の影響もあって「親日」と「反共」を中心とする領域②へと移行した。李承晩は自らの支持基盤を固めるために、「親日派」と言われた従来の勢力を「清算」せず、むしろ利用する路線を取った。また、米軍政の主導の下、日本帝国時代の旧行政組織や警察組織の復元を行うとともに共産主義者への弾圧を強めた。こうした「反共」体制は、朝鮮戦争により民衆にも多くの犠牲者が出たことで、盤石のものとなっていたという。「反共」反左派「反北朝鮮」という図式が公共的に正当化され、固定化したのである。こうした歴史的背景が「815」ドキュメンタリーシリーズの中でいかに「連続」し、「屈折」していくかが本書の第二章以降の内容である。

第二章 「8.15」ドキュメンタリーシリーズと初期の

ナン・ミナリズム宣言(1960～1970年代)

李承晩政権は、度重なる不正の末に、一九六〇年に四・一九革命によって崩壊する。政権の空白を掌握したのは、五・一六軍事クーデタを起こした朴正熙を中心とする軍部勢力であった。朴正熙を中心とする軍事政権は、新聞や通信に対しては縮小の方針を取ったが、放送に対しては拡大の方針をとり、いわゆる革命政府の下で一九六二年に定期的なテレビ放送が開始される。本書の第二章では、テレビ放送を自らの政権の正当性の主張に積極的に利用しようとした朴正熙政権期(一九六三～七九年)における「8.15」ドキュメンタリーシリーズが分析されている。ただ、章のタイトルは一九六〇年代から分析が行われているように見えるが、本章で分析の対象になっているドキュメンタリーは一九七七年八月一三日に放送された「8.15特輯」四部作シリーズの第三部『光復の歓喜』のみである。

こうした選定になったのには、いくつかの理由がある。まず、韓国社会のテレビ普及率やKBSのアーカイブ状況といった環境的な要因が挙げられる。韓国で定期的なテレビ放送が開始された一九六二年からすでに「8.15特輯」が確認できるが、そもそも映像が残っておらず、またテレビ受信機もとても高価であったため、視聴者も一部の富裕層に限定されていた。著者によれば、テレビ受信機の世帯普及率が過半数を越えたのは、経済的にある程度の成長を遂げた一九七七年であり、同年に放送された『光復の歓喜』は「タイトル」や「放送日」、「制作者」が確認できる現存の最も古い映像であるという。また、『光復の歓喜』は一九四五から一九七七までの時期を扱っており、本章の歴史の射程にも符合していたことを著者は選定の理由として挙げている。

では、同ドキュメンタリーの具体的な言説の内容はどのようなものであり、それはいかなる韓国ナショナリズムの実践であったのだろうか。

著者は『光復の歓喜』が視覚メタファーよりも聴覚メタファー、すなわちナレーションの語りをより重視する典型的な「解説的」手法のドキュメンタリーであったことを指摘し、そのナレーションの語りを「プロ

ログ」と「エピログ」、そして「本題」に分けて分析を行った。制作者の意図が最もよく表れる「プロログ」と「エピログ」では「民族」や「統一」、「新時代」や「新起源」といった「新(しい)」が強調され、「本題」では、北朝鮮との対立を明確に描くことで「反共」Ⅱ「反・北朝鮮」Ⅱ「現体制の維持」というイデオロギーが構築されていた。また、「本題」のストーリー展開において日本帝国による植民地時代の回想の尺は僅かである一方、李承晩大統領の日本訪問を歓迎する人々の様子がやや唐突に挿入されたことから同作品が「親日」的でもあったと著者は指摘する。つまり、「親日」と「反共」の理念を国民動員的手段として利用した一九四八体制の文脈が、六三年体制においても「祖国統一」という「新しい動員」のナショナリズムの中

で継承され、国家的なイデオロギー装置として始まった初期の「8.15」ドキュメンタリーシリーズにその連続性が見て取れるというのである。

第三章 激動の時代と「移民韓国人」(1980年代)

とはいえ、「8.15」ドキュメンタリーシリーズが必ずしも「反日」と「親日」、「反共」と「親共」のみを主要な言説として扱っていたわけではない。一九八〇年代になると、それまでの「反日」や「親日」、「反共」や「親共」の言説よりも、別の文脈に焦点を合わせるドキュメンタリーの制作が試みられるようになった。

この章で著者は、そうした異なった試みを示した代表的な作品として一九八二年八月八日から二週間にかけて放送された八部作『移民韓国人、このように成功した』を挙げる。著者によれば、オール海外ロケで制作され、当時としては「破格的」な制作費をかけた同シリーズにおいて、従来の「反日」と「親日」、「反共」

と「親共」の言説は全く見当たらなかったという。

では、破格的な制作費用を投資して空前絶後の八部作として制作された同シリーズは何を語ろうとしたのだろうか。それはまさに「韓国人論」であった。同シリーズは近代化只中の一九六〇年代に政府の移民奨励政策によって南米に渡った初期移民世代の逆境と成功の物語として作られ、その中で「韓国人としての矜持」が彼らのインタビューから描かれた。いわゆる「帝国／日本」や「共産主義／北朝鮮」といった「他者」ではなく、「韓国人」という「自己」を他者化しつつ、ナショナルなアイデンティティの表象づくりに取り組んだと著者は評価する。もちろん、こうした言説は、相変わらずナショナルなアイデンティティの「動員」につながるものである。ただ、そのまなざしがネーションとしての自己を他者化する省察的なものであるという点は注目に値するという。

このような言説の転換が行われた背景を著者は第一に朴正熙独裁政権の急な終焉に求める。長年続いた独

裁政権が朴正熙の暗殺によって一九七九年に急な終わりを告げたことで、既存の体制のイデオロギーから脱皮しようという動きが制作者側にあったのではないかというのである。一九八八年にソウル五輪の開催が予定されていたことで韓国社会の目が外に向かったことや、一九八〇年の「言論統廃合」によってKBSを中心とした放送改編が行われ、KBSの規模が大きくなったことなども背景として挙げられた。

第四章 他者性としての「中産階層」

「韓国」や「韓国人」をテーマに据える「8.15」ドキュメンタリーは一九八二年の『移民韓国人、このように成功した』以降も比較的に頻繁に制作が続いた。韓国社会は一九八〇年代に経済的な成長のみならず、五・一八光州抗争（一九八〇年）や六月抗争（一九八七年）といった民主化運動が行われ、政治的にも大きな変化の境目にあった。著者は、『移民韓国人、このよ

うに成功した』以降に制作されたドキュメンタリーである『韓国人の一日』(一九八七年八月一二日放送)においても「韓国人」や「国内」へのまなざしが見て取れる一方で、民主化運動の影響を汲む形での「中産階層」へのまなざしが表象されるようになったことを指摘する。

『韓国人の一日』は、多様な「中産階層」の人々の生活に密着し、その一日を映像として紡ぐ形で制作された。ただ、番組の主人公は、その生活を営む彼らではなく、制作者の質問に回答するソウル大学のハン・サンジン教授である。約五〇分の尺の内、ハン教授には三分三三秒が当てられ、彼の「中産階級」に対する解説が番組のテーマを鮮やかに表すように制作されていた。

ハン教授は、「中産階層」を単なるミドルクラスとしてではなく、「中産階層」＝「熱心」＝「推進力」＝「進歩的」＝「開化」＝「社会問題監視」＝「批判的な意見」＝「参与意向」＝「改革志向的」＝「共感」とい

う等式で捉えていると著者は指摘する。つまり、『韓国人の一日』における「韓国人」とは、「上から」のイデオロギーに従順な人々ではなく、世論をリードし、批判的で能動的に実践する「中産階層」として描かれたというのである。この背景には、このドキュメンタリーが六月抗争の二ヶ月後に放送されていることからわかるように、民主化運動と、その運動において「中産階層」の人々が果たした役割へのインパクトがあった。

ただ、こうした番組の内容は、最初から企画されていたというよりも、著者が指摘するように、制作過程におけるハン教授とのやり取りが大いに影響していると見るべきだろう。朴正熙死後に政権を取った全斗煥は、言論への統制が厳しく、当時の公共放送局が「民主化運動」＝「六月抗争」の成功物語をストレートに語ることとは難しかった。著者は、こうした既存の「8.15」ドキュメンタリーシリーズのテーマの枠から離れたテクストの存在を指し、「それぞれに独立して溶け合うことのない多数の声や意識」に着目したバフチンの「対

話」のアプローチがいかにかこうしたテキストを読み解く上で有効かを説明できる部分であると述べる。まとめるなら、『韓国人の一日』は、「普通」の韓国人の多様な声を取り入れる形で彼らの一日を構成するだけでなく、六月抗争の原動力であった韓国の「中産階層」への疑問と課題をハン教授の話を通して回答するドキュメンタリーであったのであり、こうした全国民的な変革への意志が番組の言説に集約され「新・韓国人論」として語られたという。

また、著者は、「新・韓国人論」から「北」の意味が消えていると指摘し、「新韓国人」南韓国だけのネーション＝民主主義」という図式を「中産階層」を中心に描くナシヨナリズムの実践として同ドキュメンタリーを位置付ける。すなわち、番組で表象されていたのは、従来の「民族」としての「ネーション」の概念ではなく、中産階層を中心とした「民衆」であり、まさに「民主主義的過激ナシヨナリズム (Democratic Radical Nationalism)」の言説であったとこののである。

第五章 「在日」への覚醒（一九九〇年代以降）

韓国社会が経済的にも政治的にも成熟したことや冷戦の終結によつて「反日」や「反共」言説にも変化が訪れる。例えば、『朝鮮日報』は一九八三年一月一日から一年間、「反日」ではなく「克日」を掲げた長期連載を行い、日本に「反する」のではなく、日本を「克服」することが目指された。「反共」に関して言えば、一九八九年にベルリンの壁が崩壊し、金大中政権（一九九八～二〇〇三年）や盧武鉉政権（二〇〇三～八年）が北朝鮮を訪問するという転換点を迎えていた。

こうしたことを背景に韓国社会では「在日」に対する関心が高まっていた。『朝鮮日報』における「克日」の長期連載は、他でもない三人の「在日」文筆家と一人の駐日特派員が交代に記事を担当したものである。著者は、なぜ「在日」なのかについて、新しい時代に相応しい韓国のアイデンティティを志向するにあたり、

日本と韓国の間にある先入観及び偏見を避ける意図や、「克日」という言説を広めるために従来の記事との差別化を図る必要性が背景にあったと指摘する。

他方、テレビでは『朝鮮日報』の「克日」のような「敵対より善隣友好」の動きが一九九〇年代以降に数多く表れるようになる。このようなナショナルな言説の変化にともない、「8.15」ドキュメンタリーにおいても「在日」を中心的なテーマに据える番組が急増していった。一九九〇年代に三本、二〇〇〇年代以降に三本で計六本制作されており、本章では、その中からタイプの異なる代表的な作品が二つ選ばれ、比較分析されている。「在日」を扱う六本の作品の内、日本における「在日」への「民族差別」に焦点を合わせる作品が五本、そうした単純な図式から抜け出そうと試みた作品が一本あり、それぞれを代表する作品として『まだ終わっていない金の戦争』（一九九五年八月一四放送）と『在日、悩む魂』（二〇〇九年八月一四日放送）が取り上げられた。

『まだ終わっていない金の戦争』は、日本中を騒がせた金嬉老事件を扱ったものであり、ナレーションを中心に内容が展開される「解説的」ドキュメンタリーである。金嬉老事件という題材自体が既に象徴しているように、本ドキュメンタリーは金が経験した不当な「民族差別」に焦点が合わされていた。一方、二〇〇〇年代に制作された『在日、悩む魂』は、『まだ終わっていない金の戦争』とはその語り方や取材対象からして異なっている。金嬉老とは異なり、姜尚中といった日本社会で成功した「在日」四人への取材が番組の主要な内容であり、解説者が直接彼らと会話を交えながら「在日」への疑問を紐解いていく形式であった。

著者は、『在日、悩む魂』をトランスナショナルリズムへの覚醒として評価する。同ドキュメンタリーでは、四人の異なる「在日」を登場させることで、「在日」と言ってもその内実が極めて複雑であることや、「日本」も「韓国」も「北朝鮮」も自らの祖国であるとするジョン・デセの発言など、「在日」＝「複数のアイデンテ

イティ」＝「共存」の問題としてこのテーマを捉え直す。「反日」と「反共」に回収されない民族主義やナショナリズムの中の多様性への理解が同ドキュメンタリーから見えて取れ、このような模索は、韓国人が「韓国人とは何か」を省察することとつながっており、ナショナリズムの視野をより広げる役割を果たすという。

第六章 過去・現在・未来…「戦争」と被害者（2010年代以降）

一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて日韓や南北関係は多くの進展が見られた。とりわけ、金大中政権における日本の大衆文化解放や、戦後初めての大統領の北朝鮮訪問などは特筆すべきであろう。一方、二〇〇〇年代後半以降、李明博や、「反共」と「開発動員」を推し進めてきた朴正熙大統領の長女である朴槿恵が大統領に就任するなど、韓国では再び保守派の政権が誕生した。ちょうど同じ時期に日本でも安倍晋三が内

閣総理大臣に就任、冷戦終焉や和解ムードの中で抑えられていたナショナリズムを煽る行為や言説が再び復活していく。

では、二〇〇〇年代後半以降、「反日」や「反共」、特に「反日」ナショナリズムにこうした情勢はどのように反映されたのだろうか。「反日」は従来そのままに復活したのだろうか。本書の第六章では、この問いに答えるべく、二〇一四年八月一日から二二日にかけて放送された四部作シリーズ『戦後と日本』がその第四部『忘却する国 贖罪する国』を中心に分析されている。『忘却する国 贖罪する国』は、日本とドイツの戦後処理をめぐる「差異」について検証する番組である。とは言え、以前の時代のように、「解説的」に内容を展開するのではなく、制作側が「疑問」を投げかけ、それにインタビュアーや過去の映像、ナレーションによる説明を通して「答え」ていく「対話」の形式を取っている。また、番組の内容も、ドイツは善、日本は悪という一方的な二元論ではなかった。そもそも過去「清

「算」がうまくいっているとされるドイツですら、最初は過去を忘却しようとしていたことが描かれ、戦後処理をめぐる出発点は同じであつたはずの日本とドイツの間に結果的に現時点での「差異」が生じたのはなぜかという本質的な質問を投げかけていると著者は評価する。

著者によれば、番組では、ドイツと日本との「差異」の本質として、戦犯処罰や補償の有無ではなく、「清算」が全て終わった後に教訓を不滅とさせるための未来志向の考え方の次元を取り上げていたという。「忘却する国」＝日本＝「反日」という等式ではなく、日本による戦後処理の必要性を主張するものの、それよりもこの問題をポスト「戦争」の記憶の問題として捉え直し、東アジアや欧米の戦争被害者たちまでを含んだ「世界の戦争被害者としてのネーション」へのメッセージとして構成していたのである。著者は、これを「反日」や「反共」の言説の内実が重層的になっている現象として受け止め、もはや韓国対日本に限定された「反

日」ではなく、「グローバルなネーション」を射程に入れた「反戦争」に変化していると結論づける。

三 本書の評価と課題

本書は、韓国社会のナショナリズムだけでなく、東アジアにおけるポストコロナルを考える上でも極めて重要な八月一日をめぐる韓国社会のメディア言説を通時的に明らかにした労作である。内容の要約では取り上げられなかったが、章ごとに分析の対象にしたドキュメンタリーの内容を書き起こしたものが添付されており、一八〇本に至るKBSの「8.15」ドキュメンタリー目録も巻末に添付されているなど、資料としても貴重な著作であると言える。

ただし、課題もまた多く残されている印象を受ける。こうした課題の確認作業は、本書の意義を損なうものではない。むしろ、今後の八月一日をめぐるメディア言説の分析をより精緻化していき、より大きな文脈

で考えるための道筋を検討する作業であり、その出発点となる本書の意義はより高まるであろう。以下、述べていきたい。

まず、著者も課題として述べていることだが、「8.15」ドキュメンタリーシリーズに対する分析の視点が日韓や南北関係のみに向けられている印象を受ける。一八〇本もあるドキュメンタリーの中で、植民地支配を経験した他の地域、例えば、著者も挙げている東南アジアや中国に加え、台湾やロシアへのまなざしは存在しなかったのだろうか。特に、本書でも重要な論点として論じられている「他者性」を論じるのであれば、多数の在外同胞が滞在しているサハリンや、同じく「光復節」という名称を使う台湾へのまなざしは重要な検討課題になるはずである。

また、本書で取り上げられているドキュメンタリーにいくら代表性があるとは言え、一〇年から二〇年単位のナショナルリズムの実践を一、二本のドキュメンタリーのみで明らかにすることはやや難しいのではない

だろうか。著者は一八〇本に至るドキュメンタリーの分析の末に、最も代表的な作品を選んでいられるが、時代を狭めることがあっても、ドキュメンタリーの全体像をより詳細に示して欲しかった。

次に、概念に関してだが、本書で頻繁に使われる「反日」や「親日」、「反共」や「親共」、「克日」や「知日」の定義についてより厳密に示す必要があったのではないだろうか。もちろん、著者も概念ではなく、あくまでナショナルリズムの実践に注目すると釘を打っているため、ないものねだりになっているかもしれない。ただし、であるのなら、せめてどのような実践がそれらの言葉に該当するのかをより詳細に示してもよかったのではないだろうか。所々にそれを判断する材料はあるが、その言葉使いで妥当かどうか判断に迷う箇所があった。例えば、第二章の李承晩の訪日を歓迎する人々の場面が「親日」として捉えられているが、この場合の「親日」とは、植民地支配下の「親日」や、現代における「親日」の用法とは乖離がある。用法に乖離が

あるということ自体が問題というよりも、「親日」という言葉を使う時に、その言葉に内在されたまなざしの内実がだいぶ異なることが問題であり、そのことをナショナリズムの実践として明確に示すことが必要だったのではないかという意見である。

最後に、本書が韓国ナショナリズムの一端を明らかにしていることに異論はないが、「8.15」ドキュメンタリーを扱うことが従来の八月一日をめぐる研究にどのような示唆があるのかも合わせて示して欲しかった。この問題は、新しい方法論として著者が取り入れようとするバフチンの「対話」という視座の有効性を示す上でも重要なはずである。ドキュメンタリーという映像媒体は、基本制作者の意図にしたがって作られるものであるが、取材対象の影響を強く受けやすい表現方式でもあると思われる。第四章で指摘されたハン教授の番組制作への影響は良い事例であろう。企画意図や、取材対象者の多様な声が入り混じり、意図しないコンテキストを作り出すというこの所作はまさに「対話」

そのものであるように思われる。こうした映像媒体の特性をメディア論的に展開し、そのことが従来の文学や新聞報道やドラマといった媒体による分析とはいかに異なる作業であるかが示されていたのなら、本書の意義はもっと明確に伝わったのではないだろうか。

同書の試みは、繰り返し述べてきたように、韓国現代史だけでなく、東アジアにおけるポストコロニアルの問題を考える上でも極めて重要である。その重要性に比べれば、評者が指摘した同書の課題は些細な問題かもしれない。ここで評者が述べたことが後続研究につながる手がかりとなれば幸いである。

③ 韓国社会における八月一日は、日本の植民地支配から解放された日であるだけでなく、一九四八年に朝鮮半島の南側に大韓民国という独立国家が樹立した日でもある。大韓民国の樹立が朝鮮戦争による分断国家の成立を暗示する出来事でもあったことを考えれば、八月一日という日付は日本による植民地支配の記憶のみならず、冷戦構造との関連も深い記念日でもあり、植民地支配の記憶による日本への反感や冷戦構造の中での日本との協力関係の葛藤や共存を描き出す上で大変重要な研究対象であると言える。

④ 佐藤卓巳『八月十五日の神話…終戦記念日のメディア学（増補版）』ち

くま学芸文庫 二〇一四 三三九頁。

③ 少ないとは言え、八月一日をめぐる韓国社会のメディア言説の研究が全くないわけではない。例えば、イ・ドンフの『記憶のテキスト性…光復節特集ドラマ』、『プログラム／テキスト』三、二〇〇〇年、七―一二二頁）や、チョ・トンシの『韓国新聞の一九四五―二〇〇五年光復節社説』、『新聞と放送』九月号、二〇〇五年、五六―六二頁）といった韓国語の論文が何編か存在する。大統領の演説や、記念館、歴史教科書など、様々な媒体における八月一日言説を分析した論文をまとめたシン・ジユベク、チョン・グンシク編の『8・15の記憶と東アジア的地平』（図書出版ソニン、二〇〇六年）も重要な先行研究として挙げられる。政治学的な立場からの記憶研究に焦点を合わせれば、韓国国家記念日研究の始まりとも言えるキム・ミンファンの『韓国の国家記念日成立に関する研究』（『韓国学報』九九、二〇〇〇年、二二九―一六一頁）や、小林聡明の『南北韓における記憶の管理と《歴史》の創造…解放から一九五〇年代までの（八・十五）イベントを中心に』（『日本思想』一五、二〇一三年、一七―五六頁）などがある。また、外国との比較研究としては、キム・ヤンスの『韓国と台湾文化の中の「光復」の記憶』（『中国中文学』四八、二〇一一年、六七―九二頁）などがある。